

むぎ の
い せき
麦野C遺跡8

-麦野C遺跡第15次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1244集

2014

福岡市教育委員会

むぎ の い せき
麦野C遺跡8

-麦野C遺跡第15次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1244集



調査番号 1227
遺跡記号 MGC-15

2014

福岡市教育委員会

題字は、春日市在住の日高芳子氏の揮毫による

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、共同住宅の建設に先立って実施した麦野C遺跡第15次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、平安時代に営まれた井戸や土壙と溝からなる集落跡の一部が発見されました。なかでも溝を挟んで発見された井戸は、当時の集落域の拡がりを考える上で貴重なものです。麦野C遺跡の立地する雑餉隈の丘陵地帯には、奈良時代の集落域が広範囲に拡がっていることが分かっていますが、今回の発見は、奈良時代から平安時代へと続く集落域の展開を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、施主照榮建設株式会社の関係者をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が集合住宅ビルの建設に先立って、2012（平成24）年11月1日～12月14日までに福岡市博多区銀天町3丁目28-2・28-5・28-6で緊急発掘調査した麦野C遺跡第15次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、井戸をSE、土壌をSK、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の実測と製図は主には小林が行ったが、一部は谷直子の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1227	遺跡略号：MGC-15	分布地図番号：12-0050
調査地籍：福岡市博多区銀天町3丁目28-2外		
工事面積：944m ²	調査対象面積：320m ²	調査実施面積：451m ²
調査期間：2012年11月1日～12月14日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. 井 戸	9
3. 土 壤	10
4. 溝状遺構	16
5. ピットと包含層出土の遺物	18
III. おわりに	18

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 麦野C遺跡周辺遺跡位置図 (1/10,000)	4
Fig. 3 麦野C遺跡位置図 (1/4,000)	5
Fig. 4 麦野C遺跡第15次調査区位置図 (1/1,000)	6
Fig. 5 麦野C遺跡第15次調査区周辺現況図 (1/400)	7
Fig. 6 遺構配置図 (1/200)	9
Fig. 7 4・35号井戸実測図 (1/40)	11
Fig. 8 35号井戸出土遺物実測図 (1/4)	11
Fig. 9 2・3・5号土壤実測図 (1/30)	12
Fig. 10 7・8号土壤実測図 (1/30)	13
Fig. 11 10・11・31・32号土壤実測図 (1/30)	14
Fig. 12 土壤出土遺物実測図 (1/3・1/4)	15

Fig.13 1・6号溝実測図（1/200）	16
Fig.14 6号溝出土遺物実測図（1/3・1/4）	17
Fig.15 ピットと包含層出土遺物実測図（1/4）	17
 Tab.1 麦野C遺跡発掘調査一覧表	8

図版目次

- PL. 1 1) I区全景（南から）CG合成
- 2) II区全景（南から）
- PL. 2 1) 4号井戸（西から）
- 2) 4号井戸断面（東から）
- 3) 35号井戸断面（南から）
- PL. 3 1) 2号土壤（東から）
- 2) 3号土壤（西から）
- 3) 5号土壤（西から）
- PL. 4 1) 7・8号土壤（南から）
- 2) 7号土壤（東から）
- 3) 10・11号土壤（南から）
- PL. 5 1) 31号土壤（北から）
- 2) 31号土壤遺物出土状況（北から）
- 3) 32号土壤（西から）
- PL. 6 1) I区1号溝（南から）
- 2) II区1号溝（東から）
- 3) 6号溝（南東から）
- PL. 7 出土遺物1（縮尺不同）
- PL. 8 出土遺物2（縮尺不同）

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

麦野C遺跡の立地する麦野台地は、春日市と境を接する福岡市の南東端にあり、のどかな田園風景が広がる農村地帯であった。明治22(1889)年、この地に九州鉄道の稚飼限駅が、また大正13(1924)年には西日本鉄道の稚飼駅が開設されて市街化が始まる。この恵まれた交通の利便性によって一帯の田畠は次第に住宅地と化し、一層の市街化が進んだ。ところが、近年は社会環境の変化による市街地の再開発が急速に進み、次第に低中層の共同住宅へと建て替わりつつある。

西鉄稚飼駅西口の銀天町商店街には、色々な商店や銀行、レジャー施設が建ち並び多くの買い物客でにぎわっている。この銀天町商店街のある銀天町界隈は、麦野C遺跡として周知された埋蔵文化財包蔵地（遺跡）西南部に位置し、これまでに第2・3次調査区がある。この銀天町3丁目28-2番地内に共同住宅の建設が計画され、平成24(2012)年5月21日に、埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。

これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野C遺跡内にあることから平成24(2012)年8月24日に試掘調査を実施した。その結果、申請地西南部の地表下90~135cmで鳥栖ローム層を検出し、そのローム面で土師器を伴う溝や柱穴を確認し、遺構の保全について申請者と協議した。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避出来ない事から記録保存のための発掘調査を実施することに合意した。この合意に基づいて平成24(2012)年9月24日付で照栄建設株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成24(2012)年11月1日から発掘調査を、翌平成25(2013)年度に資料整理と発掘調査報告書の作成を行うことになった。

発掘調査は平成24(2012)年11月1日よりはじめ、12月14日に無事終了した。11月末から12月は、晩秋から初冬への季節の変わり目で寒暖の差が著しく、時雨もよう日の日々が続く中で、作業に従事した方々や関係者諸氏の協力で無事終了することができた。

2. 発掘調査の組織

調査委託 株式会社 照栄建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課第1係長 常松幹雄

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍 古賀とも子（兼任）

調査担当 埋蔵文化財調査課第1係 小林義彦

調査・整理作業 秋本君子 伊藤美伸 今村ひろ子 浦崎てい子 辛川容子 板梨美紀

知花繁代 塚本よし子 遠山 純 土斐崎孝子 西田文子 柳山恵子 游フミコ

日高芳子 増田ヒロ子 松下さくり 松下由希子 森田祐子 諸泉良子 渡部律子

発掘調査にあたっては、施主の照栄建設株式会社の関係者諸氏にご協力とご配慮をいただいた。改めて深く感謝申し上げます。

なお、文化財部は、組織改編のため、平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管しました。

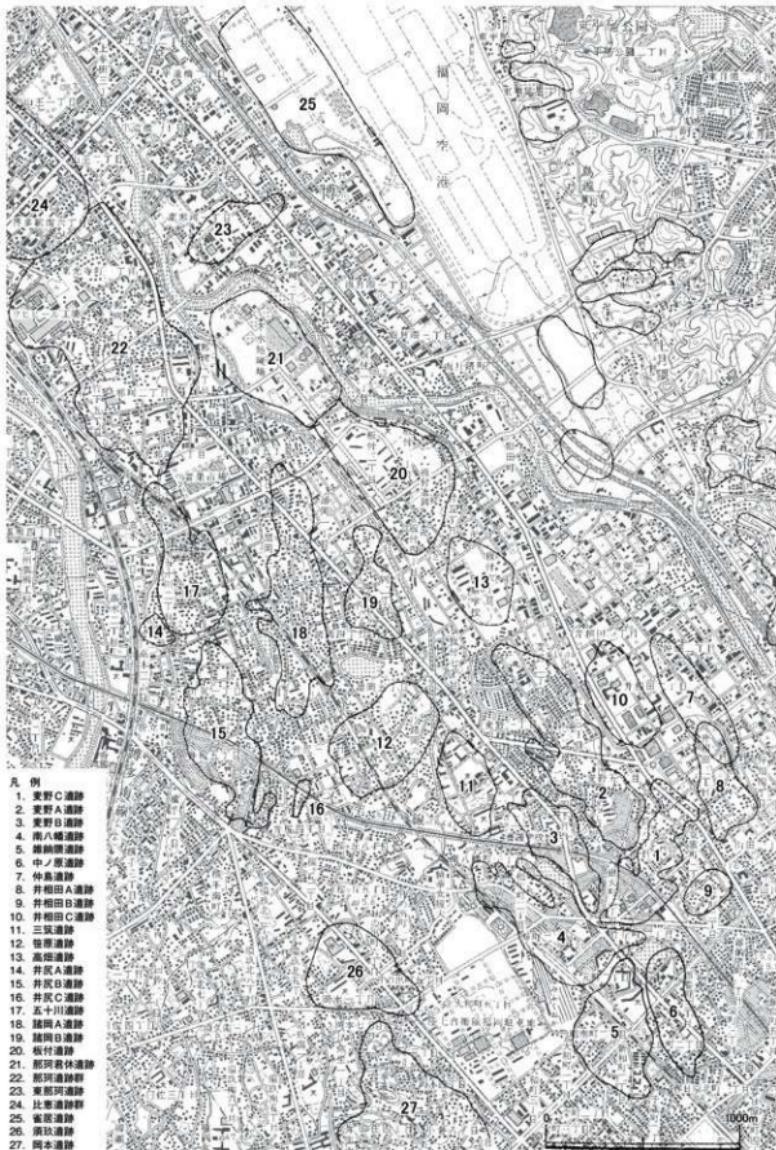


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1~3)

麦野C遺跡は、古くから雑餉と通称される雑餉隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端に位置する。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周辺域には青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡などが展開している。麦野丘陵は、春日丘陵から北東へ1,000mほどの距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤とし、諸岡川などの開析による谷が幾筋も嵌入していくつかの小さな低丘陵群を形成している。この麦野から雑餉隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡と呼んでいる。

麦野C遺跡のある雑餉隈の丘陵上でもっとも古い遺物には、旧石器時代の石刃や剥片がある。麦野A遺跡1次調査区、麦野B遺跡3次調査区、雑餉隈遺跡の5次調査区や10次調査区で出土しており、台地上の広い範囲にわたっていることが明らかになりつつある。

次の縄文時代の遺構はきわめて稀薄である。麦野B遺跡の3次調査区や南八幡遺跡の6・7次調査区、中ノ原遺跡の5次調査区で「落とし穴」と推測される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期を明確にするには至っていない。麦野C遺跡3次調査区では該期の石鐵が出土しているが、晩期の刻目突帯文期にいたるまで時期の明確な遺構や遺物は少ない。

弥生時代になると、遺構は次第に拡がりを見せる。前期は南端の雑餉隈遺跡5次調査区で、円形住居と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落のあった可能性が想起される。また、麦野A遺跡18~20次調査区や麦野C遺跡12次調査区でも貯蔵穴群が検出されており、丘陵の北部域にも拡がっている。中期は、麦野C遺跡で方形の住居が検出されている。後期には、雑餉隈遺跡5次調査区や南八幡遺跡5次調査区で方形の住居が散見されるだけのやや稀薄な拡がりを示すが、南八幡遺跡9次調査区ではガラス小玉を伴う住居や掘立柱建物が、19次調査区では連鉢式の銅鐵鋳型が住居から検出され、雑餉隈丘陵では、南縁から西縁に沿った三つの小丘陵上で比較的小規模な工房を伴う集落域が営まれたものと推考される。一方、墳墓は麦野C遺跡5次調査区で小児甕棺墓1基があるので集落域に伴う墳墓群は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡遺跡2次調査区と3次調査区で住居が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落との関連については明らかではない。

つづいて奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7世紀末から8世紀はじめには、雑餉隈遺跡9次調査区で方形に配置された大型の建物跡群が出現する。その規模と配置は官衙的な性格を想起させるものがある。さらに、8世紀前半から後半に至ると集落域は、丘陵の全域にわたって展開する。南端の雑餉隈遺跡では、5次調査区で50棟を越す住居が検出されている。また、東側の麦野C遺跡では1次調査区と5次・13次調査区で70棟にのぼる住居群がある。住居は、数回に亘っての建て替えがなされ、長期的に集落が展開していたことが推測される。西側の南八幡遺跡でも台地南縁の2・3・6・8・9次調査区を中心に集落域が展開しており、小さな丘陵ごとに多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。

なお、平安時代のはじめになると集落域は急速に縮小する。麦野A遺跡の3次調査区と本調査区(15次)で井戸や土壙が検出されているほかに柱穴から遺物が散見され、掘建柱建物の存在が想起される。

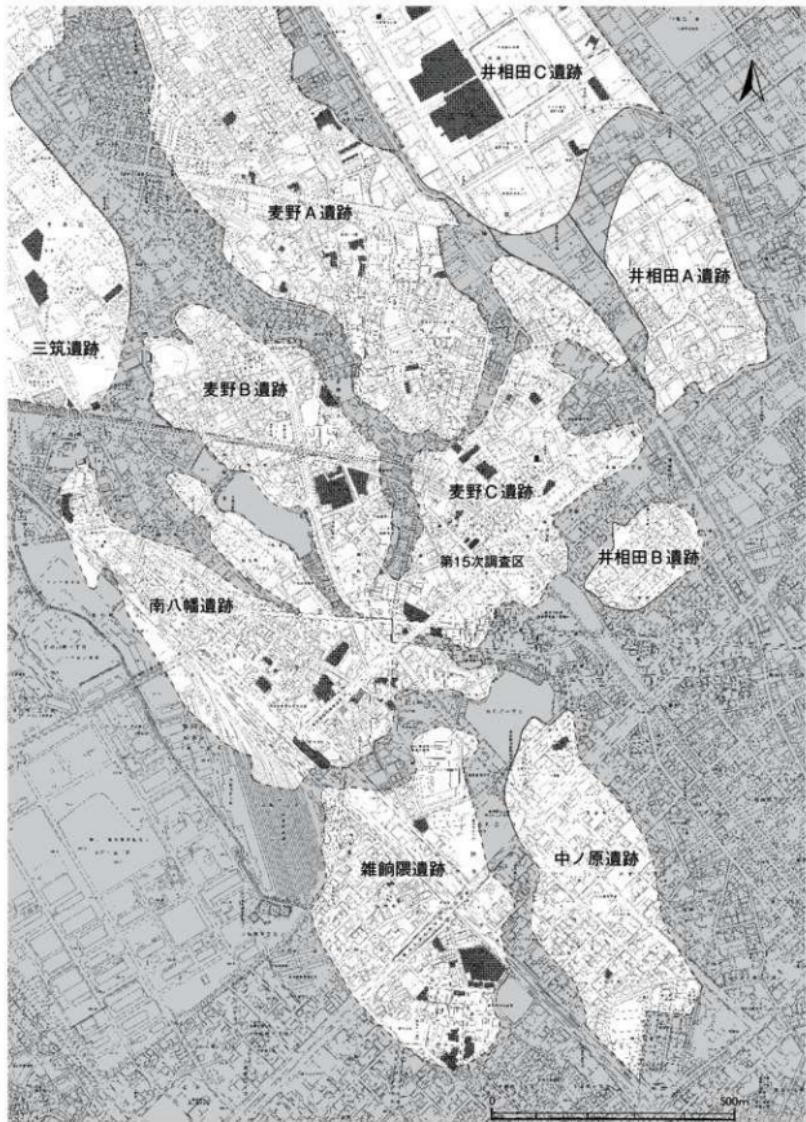


Fig. 2 麦野C遺跡周辺遺跡位置図 (1/10,000)



Fig. 3 麦野C遺跡位置図 (1/4,000)



Fig. 4 麦野C遺跡第15次調査区位置図 (1/1,000)

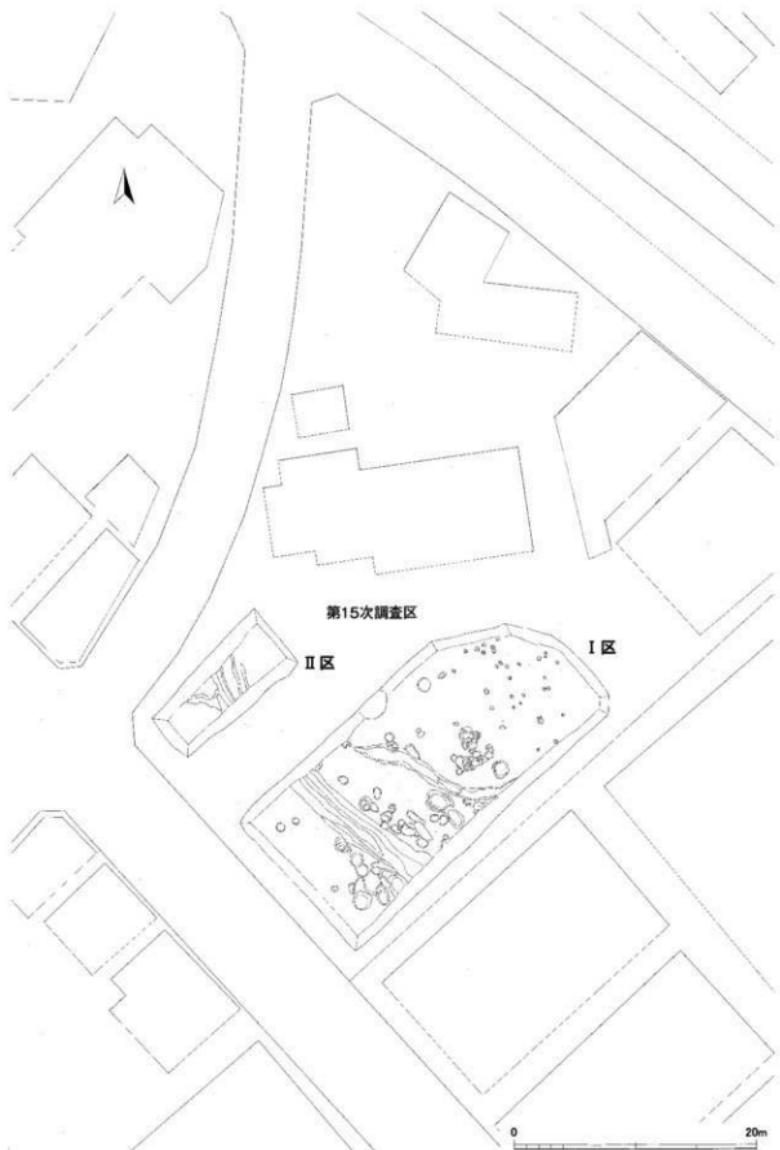


Fig. 5 麦野C遺跡第15次調査区周辺現況図 (1/400)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

麦野C遺跡は、御笠川の西岸を南北に走る雑駄限の丘陵上にある。この雑駄限丘陵は、湾入する開析谷によって五つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には南から雑駄限、南八幡、麦野C・B・Aの遺跡が縦列的に占地している。麦野C遺跡は、この雑駄限丘陵の東部に位置する東西400m、南北が800mの丘陵上に拡がる遺跡で、西縁は麦野A遺跡と麦野B遺跡が、南縁は南八幡遺跡が開析谷を隔て対峙し、東には沖積地が拡がっている。第15次調査区は、北から南へ向かって延びた丘陵が東西の開析谷に因つて中程で括れ、そして南へ拡がる丘陵のほぼ中央部に立地している。この麦野C遺跡中央部の丘陵が北から南に入る開析谷にむかって緩やかに傾斜する北西斜面に立地している。麦野C遺跡では、これまでに14地点で発掘調査が実施され、丘陵上へ緩斜面にかけて8世紀代の集落域が比較的広範囲に拡がっていることが確認されている。本調査区から北へ50mの距離には、第3・6次調査区があり、奈良時代の住居や土壙、溝などが検出されている。

発掘調査は、平成24（2012）年11月1日に調査機材の搬入とパワーショベルによる表土層の除去作業から開始した。試掘調査では、申請地の南西部に溝や柱穴などが確認されていることから、調査の対象範囲は申請地の南西部が設定されていた。また、発掘調査は、排土を申請地内で仮置きする都合上、東西に2分割して実施する事とし、遺構密度の濃い西側から着手した。その結果、西側で1号溝を検出し、北側に延びることが予測された。そのために当初の調査予定地をI区とし、東側の調査終了後に、北側に新たなII区を設定してその確認を行った。

発掘調査の結果、I区では2基の井戸と12基の土壙、2条の溝のほかに多数の柱穴を、II区では1号溝の延長線を検出して12月14日に発掘調査を無事終了した。

Tab. 1 麦野C遺跡発掘調査一覧表

遺跡名	次数	調査番号	所在地	調査面積 (m ²)	報告書	時期	遺跡の概要	主な出土遺物
麦野C遺跡	1	8949	史野6-11-4	633	361	古代（BC中～後半）	奈良：住居跡、土壙	旧石器の石刀。竪平片瓦等
麦野C遺跡	2	8904	歴天町2-4	100	年報VOL.4	古代（7～8C）	奈良：住居跡	
麦野C遺跡	3	9604	歴天町3-14	242	501	古代	奈良：住居跡、土壙、溝	
麦野C遺跡	4	9628	歴天町2-3-6	265	867	古代	奈良：住居跡	
麦野C遺跡	5	9856	史野6-12-5	871	643	弥生前末、古代	弥生：住居跡、獨立柱建物、雲板墓 奈良：住居跡、中世；土壙墓	石灯籠、始方瓦等、雲状鉢形、 鎌輪車
麦野C遺跡	6	140	歴天町13-2他	32	年報VOL.16	古代	柱穴	
麦野C遺跡	7	304	史野6-18-1	115	867	古代、近世	奈良：住居跡、獨立柱建物、土壙、落 とし穴	
麦野C遺跡	8	305	史野6-18-15	121	867	古代	奈良：住居跡、土壙、近世；井戸 [†]	
麦野C遺跡	9	306	史野6-18-16	41	867	古代	奈良：住居跡、土壙、溝	
麦野C遺跡	10	509	重富町2-1-1	677	897	古代、中世後半	奈良：住居跡、室町；溝	
麦野C遺跡	11	731	竹町1-3-2-13	294	1057	古代	奈良：住居跡、獨立柱建物跡、土壙、 土壙墓	鉄斧、平瓦
麦野C遺跡	12	746	史野6-15-3	203	970	弥生、中～近世	弥生：野麻穴 中～近世；井戸 [†] 、土壙、 溝	
麦野C遺跡	13	805	麦野6-11-2	318	1101	古代	奈良：住居跡、土壙	鉄斧、鎌輪車
麦野C遺跡	14	835	東町4-17-2-18-19	166	年報VOL.23	古代末～中世初	溝、柱穴	
麦野C遺跡	15	1227	歴天町3-28-2-5-6	451	本報告	古代末～近世	井戸 [†] 、土壙、溝	瓦器塊、須恵器、鉄鏟

2. 井戸 (SE)

井戸は、2基検出した。いずれも円形プランを呈する素掘りの井戸である。深さは200~300cmで、井戸底の標高は13.8m~14.3mである。底面の比高差は50cmあるが、湧水点の位置はほとんど大差がない。遺物の出土は、きわめて少なかった。

4号井戸 SE-04 (Fig. 7 PL. 2)

4号井戸は、I区の南西隅にある素掘りの井戸で、東側には28・29号土壙を挟んで1号溝が緩やかな弧を描きながら南へ向かって流れている。平面形は、直径が145~150cmの円形プランを呈する。壁面は、検出面より10~35cmの深さで緩やかな屈曲点を作り、そこからは底面へ向かって急速に窄まる。壁面の崩落から井戸底は未検出であるが、底面は径が30~35cmほどの円形をなそうか。標高は14.5m。覆土は、上層が黒色土の單一層、中層が指頭大~拳大の黄褐色ロームブロックを多く含んだ黒~黒褐色土、下層は灰白色シルト質粘土を含んだ黒色土で、土師器塊や須恵器片がわずかに出土した。

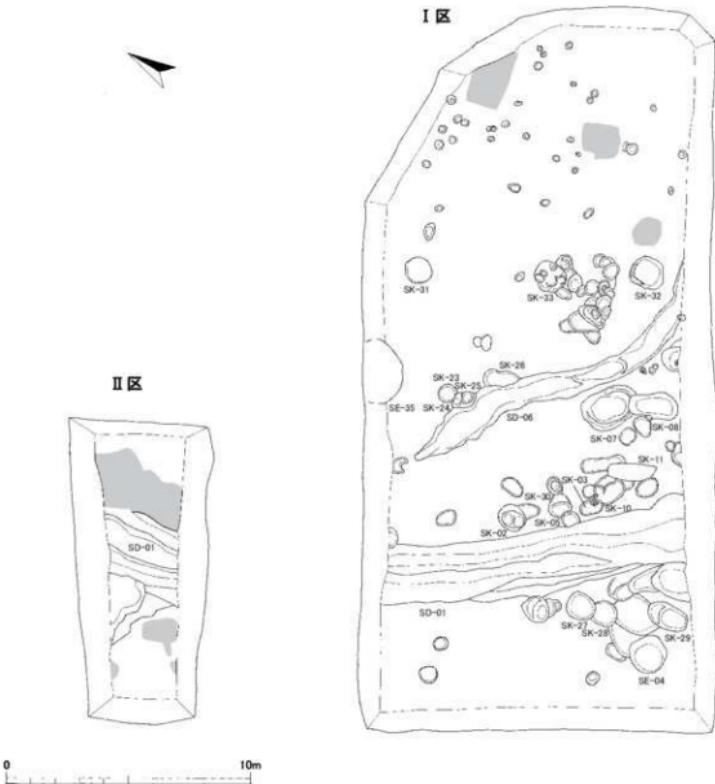


Fig. 6 遺構配置図 (1/200)

35号井戸 SE-35 (Fig. 7・8 PL. 2・7)

2号井戸は、I区北壁の中央部に位置する素掘りの井戸で、すぐ西には蛇行する6号溝が、また東へ3mの距離には31号土壙がある。平面形は、調査区外に拡がっているために判然としないが、直径が225~240cmの円形プランをなす。壁面は、20~35cmほど一旦緩やかに傾斜し、強い屈曲面を形成して井戸底に向かって急速に窄まっていく。東壁側には半月状の小さな平坦面を作る。井戸底は、直径が60cm×70cmの梢円形プランなし、断面形は浅い凹レンズ状をなす。井戸底までの深さは260cmで、標高は14.3mである。遺物は、下層から瓦器塊のほかに土師器や陶器片が出土した。

1~3は瓦器塊で、体部は内弯気味に小さく膨らんで立ち上がる。1は、口径が17.6cm、高台径が7.2cm、器高が5.5cmである。体部の調整は、ヘラ先状工具によるやや粗い研磨で仕上げている。高台は、小さく外方に摘み出す。胎土は良質で、体部から外底面まで黒色、内面は淡灰白色。見込みには細線で「メ」を記号状に刻んでいる。2は、口径が16cm、高台径が6.2cm、器高は5.6cmである。内面は、押圧後ヨコ方向の研磨。口縁部下と高台部に黒色面があり、外黒の瓦器塊であろう。胎土は緻密で、微細~小砂粒と雲母微細を少量含む。外面は黒~黒灰色、内面は乳灰色。3は、高台径が6.2cm。胎土は緻密で、外面は黒色、内面は乳灰色。

3. 土 壙 (SK)

土壙は、12基検出した。プラン的には円~梢円形で、規模的には若干の差違がある。分布的には、I区中央部の1号溝と6号溝を挟んだ範囲にまとまって拡がる傾向が窺える。遺物は、そのほとんどが瓦器塊と土師器小皿である。

2号土壙 SK-02 (Fig. 9・12 PL. 3・7)

2号土壙は、I区の西寄りに位置し、すぐ西には1号溝が南流している。平面形は、長軸が115cm、短軸が105cmの円形プランをなし、主軸方位をN-13°-Wのとる。壁面は、中段に緩やかな屈曲面を作り、それを境にして上方は大きく開く。壁高は、32cm。壙底は、浅い凹レンズ状をなし、南北小口壁間にフラット面を造る2段掘りの構造をなし、比高差は10cmである。覆土は、黒褐色土の単一層で瓦器塊や土師器皿、小皿が屈曲面を挟んで出土した。

4~5は、土師器小皿である。4は、口径が9cm、底径が6.4cm、器高は1.1cm。5は、口径が8.7cm、底径が6.3cm、器高は1.1cmである。短い体部は、ストレートに外反する。体部はヨコナデ、底部はナデ調整。胎土は良質で、微細~小砂粒と雲母微細を含み、色調は淡明黄橙色。6~8は、瓦器塊である。6は、浅い皿状の瓦器塊で、口径が14.4cm。短く外反する口縁部下には屈曲線を作る。胎土は緻密で、微細~石英小砂粒と雲母微細をわずかに含む。色調は淡明橙色。7・8は、黒色瓦器塊である。7は、口径が16.6cm、高台径が6cm、器高は5.4cm。内弯気味の膨らむ体部の中位には、浅い凹線が巡り、幅広の高台は、わずかに内傾する。8は、口径が16.3cm、高台径が6.2cm、器高は4.8cm。体部はストレートに外反し、下位に緩やかな稜を形成する。いずれも体部は、ヘラ先工具による研磨。胎土は緻密で、微細~細砂粒と雲母微細をわずかに含む。色調は、7が濃灰黒色、8は外面が黒~淡明黄色、内面は黒色である。

3号土壙 SK-03 (Fig. 9・12 PL. 3・7)

3号土壙は、I区の西を北流する1号溝の東岸に接して位置する小土壙で、南東隔壁は10号土壙と接している。平面形は、長軸が94cm、短軸が58cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はN-43.5°-Wのとる。壁面は、東小口壁と南側壁が垂直に、西小口壁と北側壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は、15cmを測る。北側壁側には、長さが31cm、幅が17cmの溝状の小ビットがあり、その上縁

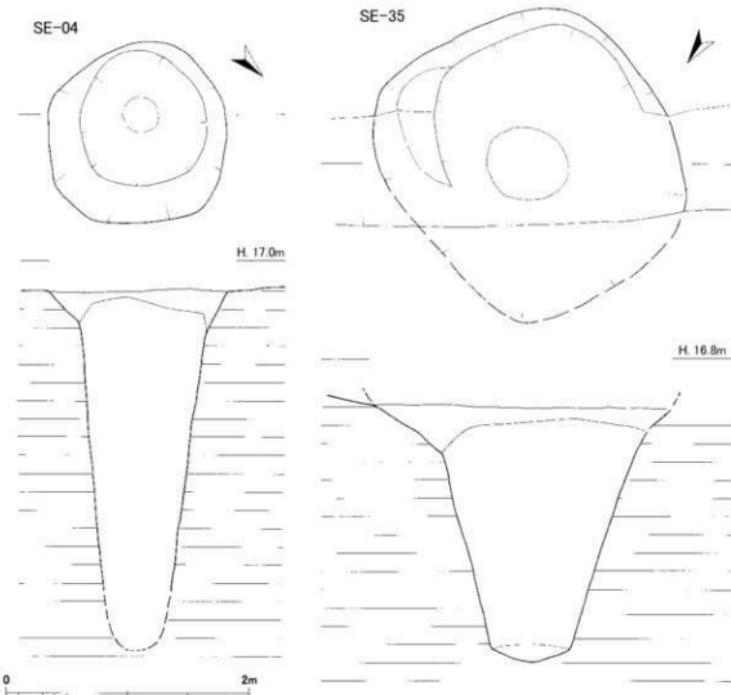


Fig. 7 4・35号井戸実測図 (1/40)

から瓦器塊が1点出土した。床面は、中央部を境にして東側がフラット、西側は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、黄褐色ロームブロックの混入した黒色土で、瓦器塊と土師器片が出土した。

9は、口径が16.1cm、高台径が6.4cm、器高が6.2cmの黒色瓦器塊である。体部は半球形をなし、口縁部下には4条の浅い凹線が巡る。調整は、ヘラ先工具で丁寧に磨き上げている。外底面はナデで、疊付には板目痕が残る。胎土は良質で、微細～細砂粒を含み、色調は淡灰色～黒色を呈する。

5号土壤 SK-05 (Fig. 9・12 PL. 3・7)

5号土壤は、1区の西部を北流する1号溝の東岸に接して位置する小土壤である。平面形は、直径

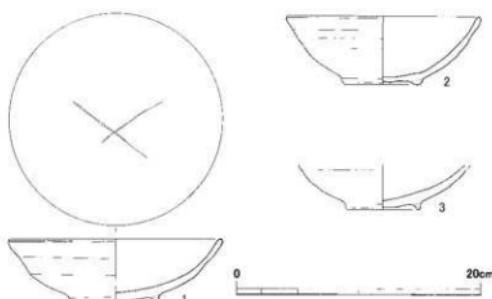


Fig. 8 35号井戸出土遺物実測図 (1/4)

が70cm余の円形プランを呈し、南壁は1号溝に削平され、北壁は30号土壙の南壁を切っている。壁面は、やや緩やかに立ち上がるが削平が著しく、壁高は、15~23cmと浅い。壙底は、ほぼフラットで、断面形は、逆台形状の箱形をなす。覆土は、暗黒茶褐色土の單一層で、瓦器塊や土器師器皿が出土した。

10~13は、瓦器塊である。10は、口径が13.8cm。偏球形の体部は、中位が厚く、外面に緩やかな稜を作る。色調は淡明黄橙色で、内面には黑色部が残る。11は、口径が15cmで、体部はストレートに延びる。色調は外面が乳黃白色、内面は淡灰白色である。12は、高台径が6cmの黒色瓦器塊である。色調は、内面が淡黒色、外面は淡灰黒色。13は、口径が16.6cm、高台径が6.4cm、器高が4.8cmの黒色瓦器塊である。偏球形の体部中位に緩やかな稜を作り、そこから口縁部へ反り気味に続く。外反する高台の豊付は小さく跳ね上げている。色調は黒~白灰色。いずれも丁寧な研磨調整で、緻密な胎土には、微細~小砂粒と雲母微細を含む。

7号土壙 SK-07 (Fig. 10・12 PL. 4)

7号土壙は、I区の中央部南端に位置する大型の土壙で、すぐ東には6号溝があり、南隔壁は8号土壙の北小口壁に因って削平されている。平面形は、長軸が226cm、短軸が157cmの不整な梢円形プランを呈し、主軸方位をN-65°-Wにとる。壁高が23~28cmの壁面は、緩やかに立ち上がり、北隔壁を除く壁面の中程には、幅が5~20cmの小さなフラット面が巡っている。壙底は、平坦であるが、北壁側は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、黒茶褐色土の單一層で、瓦器塊や白磁碗のほかに土器師器や陶器腹片が出土した。

14は、高台径が6.4cmの瓦器塊。良質な胎土は、比較的多くの微細~細砂粒と少量の石英小~中砂粒、赤鉄鉱塊片を含む。淡明黄橙色。15は、高台径が6.4cmの白磁碗。胎土は緻密で、中砂粒を含む。

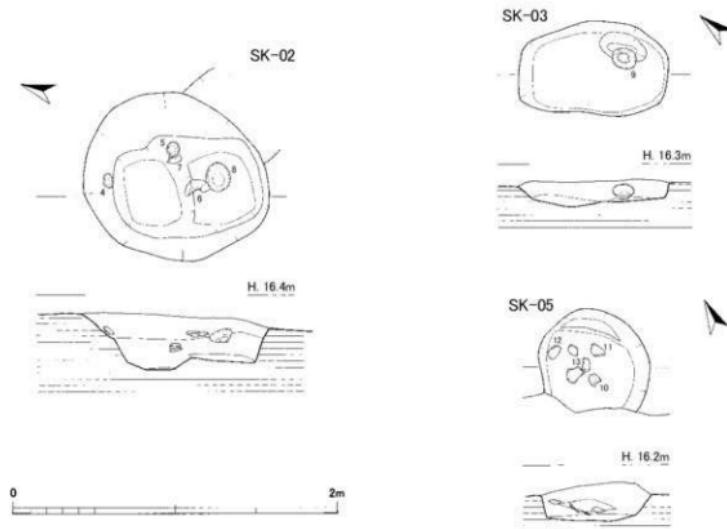


Fig. 9 2・3・5号土壙実測図 (1/30)

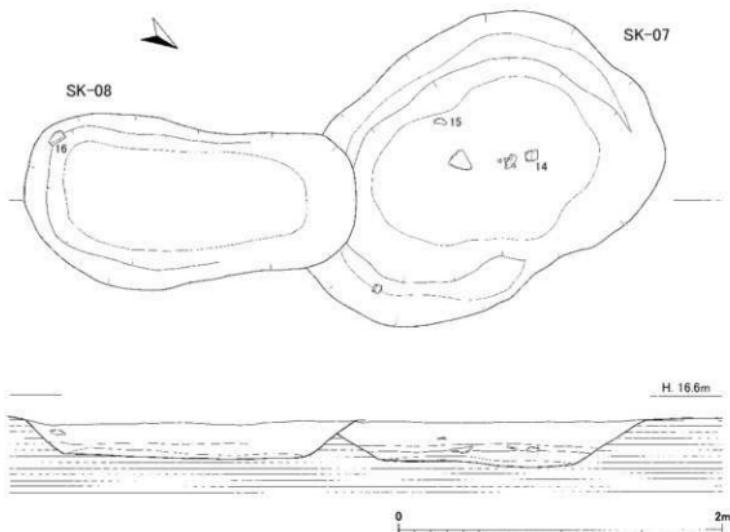


Fig. 10 7・8号土壙実測図 (1/30)

8号土壙 SK-08 (Fig. 10・12 PL. 4・7・8)

8号土壙は、I区の西側を南流する1号溝と6号溝の間に位置する大型の土壙で、すぐ東には6号が接している。平面形は、205cm、短軸が83～96cmの卵円長方形プランを呈し、N-25.5°-Wに主軸方位をとる。南小口壁側は、やや下彫れ的に膨らみ、北小口壁は、7号土壙を切っている。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は20cm。北小口壁を除く壁面には緩やかな屈曲面がある。壙底は、フラットで、覆土は、黄褐色ローム粒を含んだ暗黒茶褐色土で、南西隅壁際から瓦器塊が出土した。状況的に土壙墓の可能性も無くはない。

16は、高台径が6.4cmの瓦器塊である。体部は半球形をなし、直立する高台の置付はわずかに内傾する。緻密な胎土には、比較的多くの微細～石英小砂粒と赤鉄鉱片をわずかに含む。淡明黄橙色。17は、棒状の不明土製品である。断面形は円形をなし、直径は4.9～5cm。調整は、指頭押圧による丁寧な手捏ね。胎土は精良であるが、石英細～中砂粒を多く含み、色調はくすんだ橙灰褐色。

10号土壙 SK-10 (Fig. 11・12 PL. 4・7)

10号土壙は、I区の西寄りを北流する1号溝の東岸に位置し、南東隅壁は11号土壙に切られている。全体的に削平が著しいが、平面形は、長軸が130cm、短軸が103cmにろう。壁高は7～10cmと浅く、緩やかに立ち上がる。壙底は、平坦で北壁側は2段掘り状の構造をなしている。断面形は、逆台形をなす。覆土は、黒茶褐色土で瓦器塊と土師器坏、皿片が出土した。

11号土壙 SK-11 (Fig. 11 PL. 4)

11号土壙は、I区の西寄りを流れる1号溝の東岸にある土壙で、北西隅壁は10号土壙と重複し、それよりも新しい。南小口壁は消失しているが、平面形は、短軸が66cmの長方形プランをなし、長軸

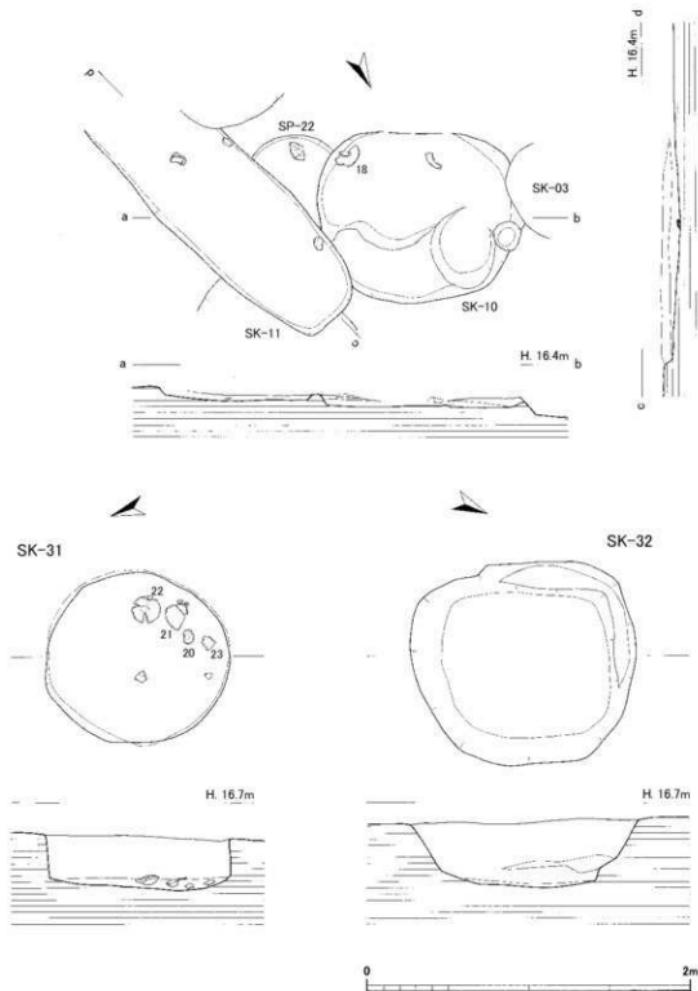


Fig. 11 10・11・31・32号土壤実測図 (1/30)

は200cmほどにならうか。主軸方位は、N-20°-Wにとる。平坦な床面は南へ向かって緩やかに傾斜し、断面形は逆台形をなす。壁高は、4~8cmと浅い。覆土は、ローム粒と小ブロックを含んだ黒褐色土で、瓦器塊と土師器甕、鉢片がわずかに出土した。

18は、口径が6.2cm、高台径が6.6cm、器高が5.7cmの瓦器塊である。体部は半球形をなし、高台は小さく外反する。胎土は緻密で、微細～石英小砂粒と雲母微細をわずかに含む。淡明黄白色。

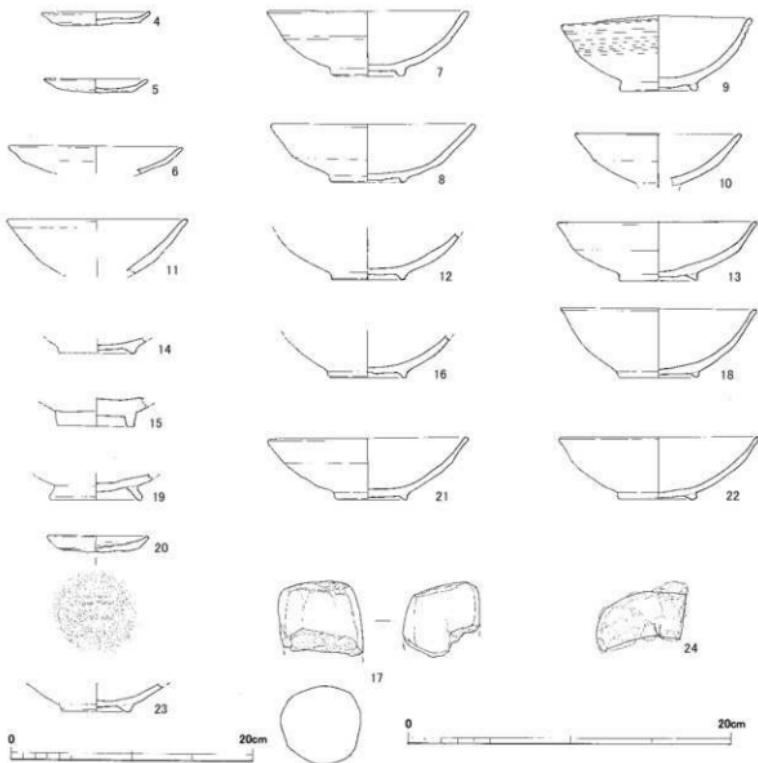


Fig. 12 土壌出土遺物実測図 (1/3・1/4)

29号土壌 SK-29 (Fig. 6 PL. 1)

29号土壌は、調査区の南西隅に位置し、すぐ西には4号井戸が、東には1号溝はある。平面形は、長軸が170cm、短軸が100cmの楕円形プランを呈し、N-10.5°-Wに主軸方位をとる。深さが31～48cmの壁面は、緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状を呈する。北小口壁側には、壙底から15cmほど上に半月形のフラット面が付設された2段掘りの構造をなしている。覆土は、濃茶～黒茶褐色土で、瓦器塊や土師器片出土した。

19は、高台径が7.6cmの瓦器塊である。高台は、ストレートに長く外反し、端部は丸く納めている。胎土は緻密で、微細～細砂粒と赤鉄鉱塊片をわずかに含む。色調は、淡黄橙色。

31号土壌 SK-31 (Fig. 11・12 PL. 5・8)

31号土壌は、I区の北隅に位置する円形土壙で、西へ3mの距離には35号井戸がある。平面形は、直径が105～110cmで、垂直に立ち上がる壁面は、壁高が30cm。西壁側は、わずかの袋状に迫り出している。壙底は、浅い凹レンズ状をなし、箱形の断面形をなす。覆土は、黄褐色ロームブロックを

含んだ黒茶～茶褐色土で、北壁際の壇底に瓦器塊や土師器小皿が貼り付いた状態で出土した。

20は、口径が8.3cm、底径が6.2cm、器高が1.4cmの土師器小皿である。体部は短く内弯し、口縁端部は上方へ小さく摘み上げている。体部はヨコナデ、底部はナデ調整で、内底面に稍圧痕が残る。胎土は精良で、微細～細砂粒と雲母微細を含み、色調は淡黄白色。21・22・23は、瓦器塊である。21の口径は16.6cm、高台径が5.9cm、器高は5.9cm。半球形の体部はストレートに立ち上がり、口縁部下に緩やかな稜を作る。22は、口径が16.5cm、高台径が6.6cm、器高は5.1cm。体部は緩やかな半球形をなす。21・22の胎土は良質で、比較的多くの細～中砂粒と僅少の赤鉄鉱塊片を含む。色調は、21が淡橙色、22は淡黄橙色。23は、高台径が5.8cm。胎土は精良で、多量の細～小砂粒と僅少の石英粗砂を含み、色調は淡黄橙色。

32号土壠 SK-32 (Fig. 11・12 PL. 5・8)

32号土壠は、I区の南東隅に位置する土壠で、すぐ南には蛇行する6号溝がある。平面形は、長軸が140cm、短軸が122cmの不整な隅丸方形プランを呈し、N-29°-Wに主軸方位をとる。深さが42cmの壁面は、北西隔壁の壇底近くにL字状の小さなフラット面を造る。壇底は、浅い凹レンズ状をなし、断面形は緩やかな逆台形をなす。覆土は、黒色土の單一層で、土師器片がわずかに出土した。

24は、鎌の切っ先片である。現長は6.1cm、身幅は2.7cm、背厚は0.4cm。

4. 溝状遺構 (SD)

溝状遺構は調査区の西側で2条を検出した。いずれも集落あるいは水利灌漑に伴うものと考えられるが、調査区内では完結せず、その規模や機能は明らかでない。

1号溝 SD-01 (Fig. 13 PL. 6)

1号溝は、I区の西を北流する幅広な溝である。溝は、I区では一旦は北西に向かって流れるが、

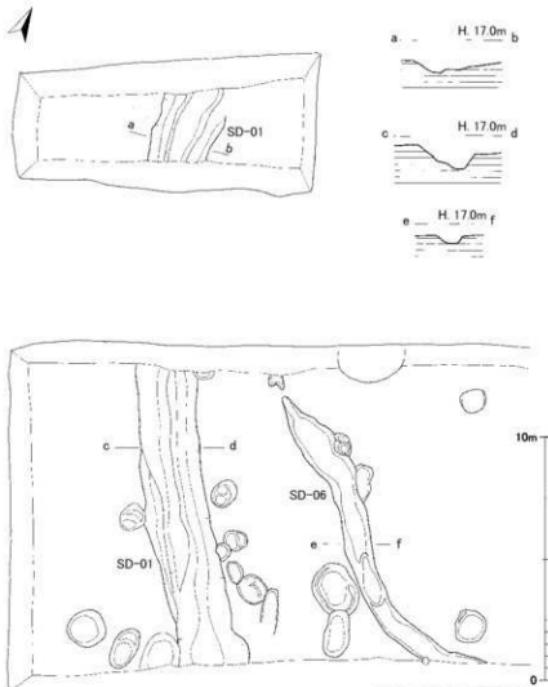


Fig. 13 1・6号溝実測図 (1/200)

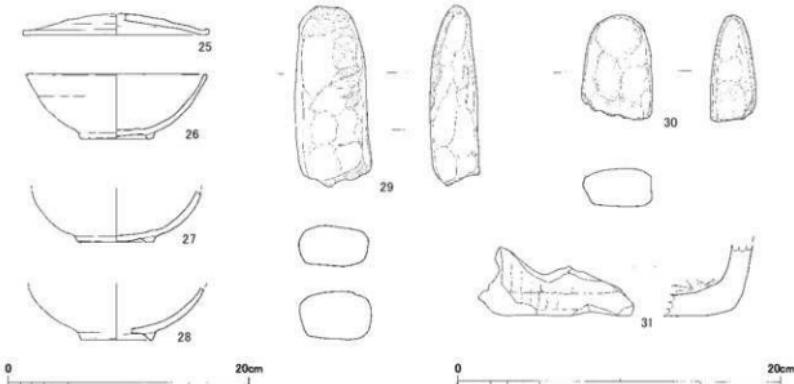


Fig. 14 6号溝出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

II区に至って流れを北へ替える。俯瞰すると西へ緩やかに膨らみながら弧を描くように南流する。溝幅は、240~260cmを測る。壁面は、緩やかに立ち上がり、西壁の中段には40~80cm幅のフラット面を作る。このフラット面はII区の西岸まで続き、II区の東岸にもフラット面を作るが、I区では消失している。溝底の幅は、35~60cmで南端では125cmと広くなる。断面形は、上縁幅の広いU字状をなす。また、II区には縦杭が打ち込まれていた。覆土は、黒~黒茶褐色土で、遺物は土師器片や陶器片が出土した。土~中層には中~近世の陶器が含まれており、改修を重ねながら長く機能していたものと考えられる。

6号溝 SD-06 (Fig. 13 · 14 PL. 6 · 8)

6号溝は、I区のほぼ中央に位置し、南端の東岸には32号土壙が、対岸の西岸には7·8号土壙がある。溝は、I区の南端から西へ弧を描きながら流れ、途中で反転して西へ向かって直線的に延びる。この溝は、I区の北端で一旦途切れた後に30cmほどの間を置いて更に西流するが、II区までは至っていないと思われる。溝幅は104~155cmで、深さは20cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は茶褐色~濃茶褐色土で、遺物は須恵器壺蓋や瓦器塊のほかに土師器壺・皿・陶器甕片・石鍋片・土製品等が出土した。

25は、口径が15.4cmの須恵器壺蓋である。口縁部は、上縁を上方に跳ね上げるように摘み上げている。調整は、天井部が粗いヘラケズリ、体部はヨコナデ、内面はナデ。胎土は精緻で、微細砂をわずかに含み、色調は淡灰白色。25~27は、瓦器塊である。26は、口径が15cm、高台径が6.1cm、器高は5.3cm。半球形の体部は、ややストレートに延び、丁寧な研磨痕が残る。疊付は内にわずかに摘み出している。胎土は緻密で、微細~細砂粒と雲母微細をわずかの含み、色調は淡明黄褐色である。27は、高台径が6.4cmで、疊付は、幅広で低い。胎土は良質で、微細~石英中砂粒を比較的多く含む。色調は淡明黄橙色。28は、高台径が6cmで、体部は大きく膨らみながら立ち上がる。疊付は尖り気味で、

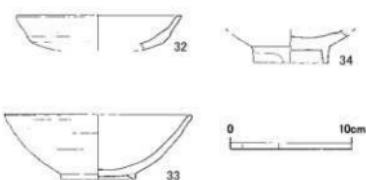


Fig. 15 ピットと包含層出土遺物実測図 (1/4)

高台はやや高い。緻密な胎土には、微細～石英小砂粒ほかに雲母微細と赤鉄鉱塊片をわずかに含む。色調は、内面がくすんだ淡黄橙色、外面は淡明赤橙色をなす。29・30は、使途不明の棒状の土製品である。いずれも指頭押圧による手捏ねで、断面形は扁平な梢円形をなす。胎土は粗く、細～石英砂粒を多く含む。29はくすんだ黄灰色、30は淡橙～灰黄褐色。31は、滑石製石鍋片の底部。内外面には鑿痕が明晰に残り、内面には炭化物痕が、外面には煤が付着している。

5. ピットと包含層出土の遺物

井戸や土壙のほかに柱穴を検出したが、掘建柱建物としてまとまるものはなかった。また、基盤をなす鳥居ローム層の上には黒褐色土が薄く堆積しており、この層中に土師器片など遺物がわずかに包蔵されていた。

32は、23号ピットから出土した口径が13.4cmの内黒瓦器皿である。体部の中位にやや強い稜を作り、口縁部は稜線から器厚を細めながらストレートに外反する。調整は、口縁部外縁がヨコナデ、体部は研磨状のナデ、内面はナデ。胎土は精緻で、微細砂と雲母微細を含む。内面は淡黒色、外面は淡黄橙色の内黒瓦器塊である。

33・34は、包含層より出土した。33は、口径が15.4cm、高台径が6.2cm、器高が5.3cmの瓦器塊である。体部は、扁平な半球形をなし、口縁部下は凹線状に浅く窪む。高台は、やや外方に摘み出している。体部内面は丁寧なナデ、内定面は指頭押厚後にナデ。胎土は緻密で、微細砂粒をわずかに含み、色調は淡黄橙色。34は、底径が6.2cmの白磁碗である。疊付は水平で、高台は細く高い。高台と外底面は無釉である。

III. おわりに

第15次調査では、井戸2基と土壙12基、溝遺構2条のほかに柱穴を検出したが、面積的制約から麦野C遺跡における全体像は明らかにはし得ないが、向後に備えて簡単に整理しておきたい。

本調査区は、北東から南西に延びる丘陵が緩やかに南へ屈曲して拡がる東西長300m、南北長が400mの丘陵の中央部の尾根筋に立地するが、耕地化によって東側は大きく削平されている。そのため2基の井戸と1号溝を除いて遺構の遺存状況は浅く、遺物も壌底に貼り付いた瓦器塊や土師器小皿が出土したに過ぎない。これらの井戸や土壙は、出土した瓦器塊から12世紀代前半頃の古代末に比定される。また、西に緩やかな弧を描くように蛇行する幅広の1号溝は、覆土や土壙との重複から土壙群に若干後出する時期が考えられ、その後浚渫を繰り返しながら近世まで使われている。この両者は、開削期には概ね一体として機能したと考えられる。溝の本来的目的は、集落域と外部とを画するものと考えるのが最も合理的と云えるが、集落の中心域の所在やその拡がりを推し量るには延長が24mの溝では俄には詫じがたい。しかしそうした状況的には、1号溝の東岸が耕地化による開削で低くなっていることを勘案すると、西側の尾根筋に集落域が、東には耕地が拡がっていると考えるのが合理的と思われる。また、麦野の丘陵域には、弥生時代後期～古墳時代初めと奈良時代に大きな集落域を画する時期があり、奈良時代以降は閑散とした寒村域となる趣が窺われ、調査区域の少ない麦野C遺跡では12世紀代の遺構は未検出であった。しかしながら、本調査での発見は、該期の集落域の展開を示唆するものある。爆発的に展開する奈良時代の大集落域が、平安時代から中世へどのように展開し消長していくのか、今後の周辺域の調査事例の増加を待って検討する必要があろう。



1) I 区全景(南から) CG合成



2) II 区全景(南から)



1) 4号井戸(西から)



2) 4号井戸断面(東から)



3) 35号井戸断面(南から)



1) 2号土壤(東から)



2) 3号土壤(西から)



3) 5号土壤(西から)



1) 7・8号土壤(南から)



2) 7号土壤(東から)



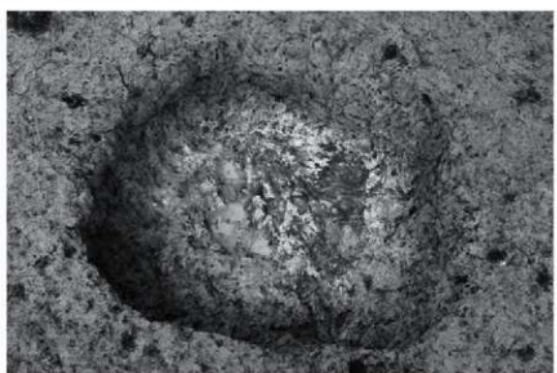
3) 10・11号土壤(南から)



1) 31号土壤(北から)



2) 31号土壤遺物出土状況(北から)



3) 32号土壤(西から)



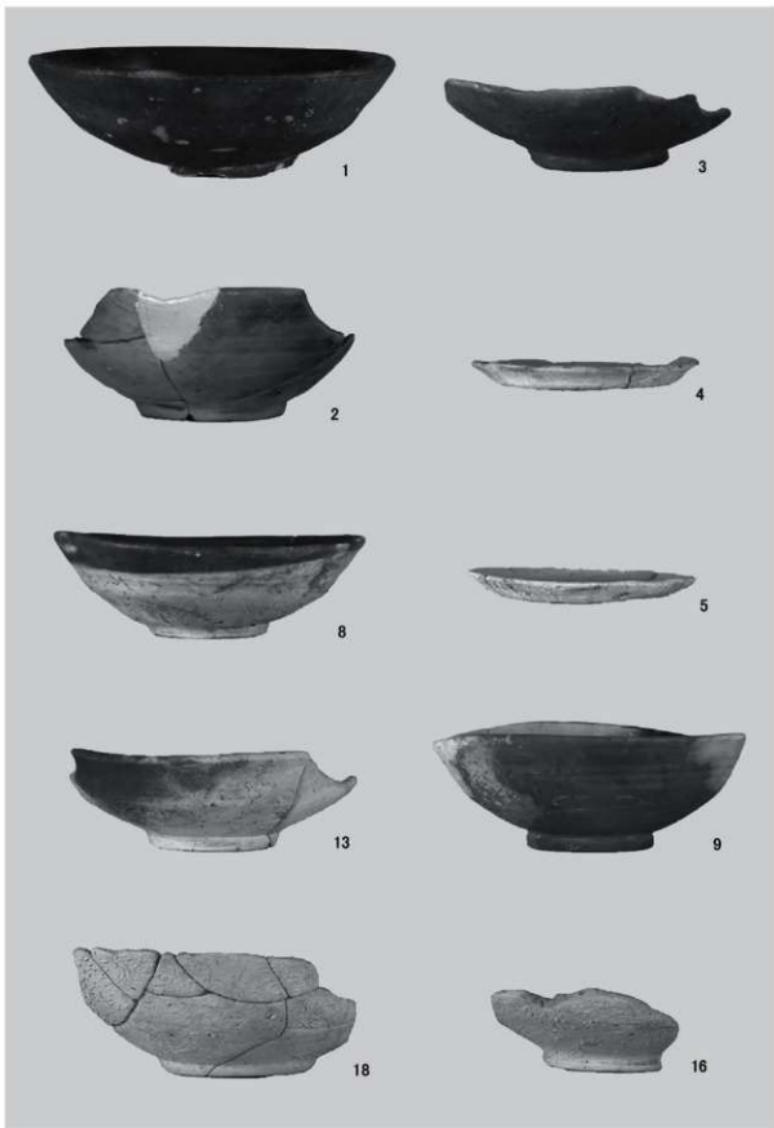
1) I区1号溝(南から)



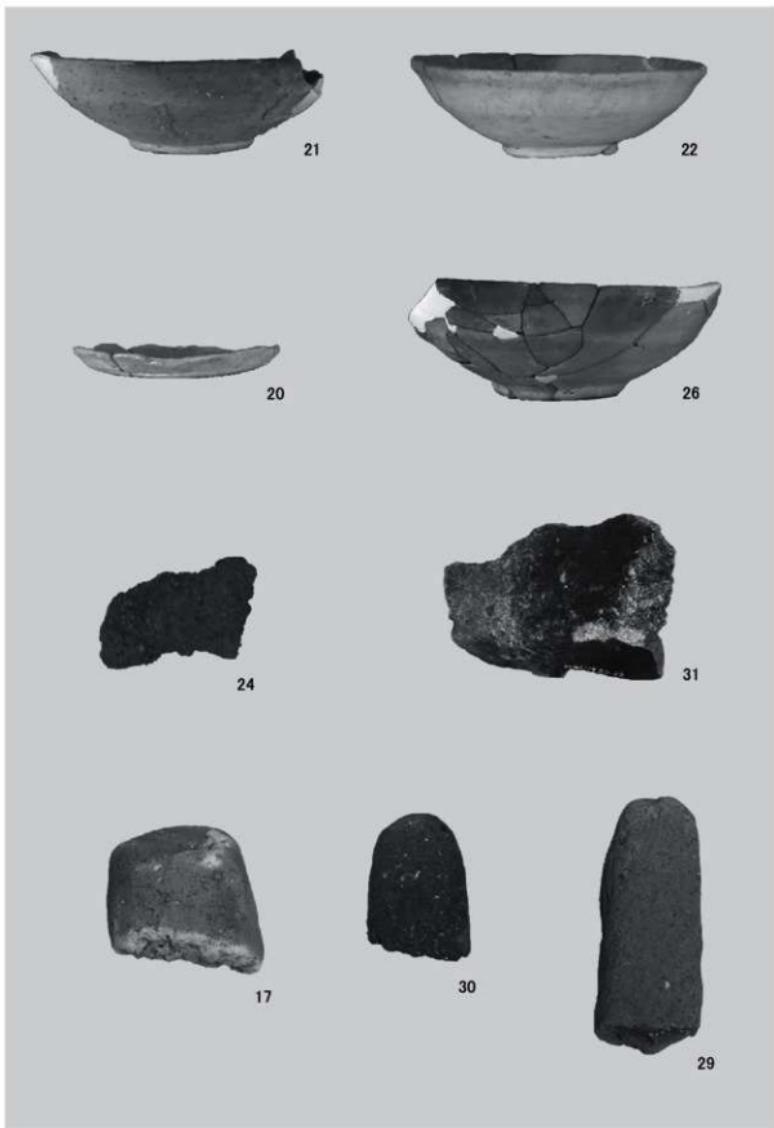
2) II区1号溝(東から)



3) 6号溝(南東から)



出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)

報告書妙録

ふりがな	むぎのCいせき8							
書名	麦野C遺跡8							
副書名	麦野C遺跡第15次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1244集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2014年3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
麦野C遺跡 第15次調査	福岡市博多区 銀天町3丁目 28-2・5・6	40130	50	33° 32' 38"	130° 27' 44"	20121101 ~ 20121214	45m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
麦野C遺跡	集落	平安時代	井戸、土壙、溝	瓦器				
要約	麦野C遺跡は、御笠川の中流域左岸の麦野から雜駒隈にかけて南北にのびる低丘陵に位置する。この麦野から雜駒隈にかけて並ぶる雜駒隈丘陵は、弯入する開析谷によって六つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には、北から麦野A～C遺跡、南八幡遺跡、雜駒隈遺跡、中ノ原遺跡が占拠している。麦野C遺跡は、この雜駒隈丘陵の中央部に位置し、北は麦野A遺跡、北西部は麦野B遺跡、西は南八幡遺跡と開析谷を隔てて対峙している。麦野C遺跡は、北北東から南南西にのびる長さが800m、幅が350mで、本調査区（第15次調査）は、この麦野C遺跡の中央部南寄りに位置し、200m北には奈良時代の住居跡群がある第1・5・13次調査区がある。発掘調査では、平安時代の土壙12基+αと井戸2基、溝遺構2条のはかに柱穴を検出した。このうち土壙からは、内黒瓦器塊や土師器小皿が出土した。井戸は、素振りのものである。また、溝遺構のうち溝幅が260～280cmの1号溝は、丘陵の尾根を横断する溝で浚渫を繰り返しながら近世まで機能していたことが窺える。雜駒隈丘陵には奈良期の集落域が検出されているが、本調査区での平安期の遺構の検出は丘陵上における奈良～平安時代の集落域の消長を考える上で貴重な資料である。							

麦野C遺跡8

-麦野C遺跡第15次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1244集

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 (株)九州カスタム印刷
福岡市博多区東比恵3-16-15